

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第20回 ドミニカ共和国

エクトル・パウリノ・ドミンゲス・ロドリゲス
駐日ドミニカ共和国大使

ラテンアメリカで 最も成長率の高い国

— 国民の現政権支持率は史上最高 —



ドミニカ共和国（カリブ海には他に「ドミニカ国」があるが、本項では以下「ドミニカ」と表記する）のエクトル・ドミンゲス大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、5月に行われた大統領選挙、国会議員選挙及び地方議員選挙の結果、最近の同国の経済状況、同国の政策課題、日本との関係、対中関係、米国・キューバ外交関係再開の同国への影響等について見解を表明した。

— 大使は日本に着任されて約3年になりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞在中で最も印象深い思い出は？

大使 この美しくも居心地の良い国日本では驚かされるのが沢山あります。自然を尊び大事にすること、仕事に対する献身的な姿勢、科学技術探究への熱意、過去の偉大な偉業と現在の素晴らしい業績等々です。しかし私にとって最も印象的なのは、すべての日本人がこの国の神聖なものを大切に守ろうとする姿勢です。両陛下の臨席される行事はこの上ない厳かさ感謝の念に溢れています。それはこの偉大な国の伝統と文化的、政治的価値を表していると思います。

— 去る5月15日にドミニカで行われた大統領選挙、国会議員選挙及び地方議員選挙の結果はいかがでしたか。

ドミンゲス大使はドミニカ・カトリック大学、ハバナ大学およびマドリード大学で貿易・外交を専攻。電気通信院地方自治体担当、財務省所得税局徴税官、地方自治体連盟副総裁等を歴任後、2013年9月より現職。

インタビューの一問一答は次のとおり。

大使 ダニロ・メディナ・サンチェス現大統領が62%の得票で再選されました。民主的大統領としては歴史もっとも高い率です。与党ドミニカ解放党(PLD)はドミニカ革命党(PRD)他13党と連合を組み、国会でも多数を制しました。上院(32議席)で29議席、下院(190議席)で125議席を確保しました。また地方選挙では単独で155の市町村で勝利し、与党連合としては市長及び市議会議員等の60%以上を押さえました。これはドミニカの政治史上初めてで、いわんや再選候補としてはかつてない快挙です。ドミニカ国民はメディナ大統領の実績を認めたということです。最近の世論調査結果は同大統領の支持率がラテンアメリカで最も高いことを示しています。

— ドミニカはパナマと並びラテンアメリカで最も高い経済成長率を遂げている国ですが、成長の原動力は何でしょうか。経済の現状と今後の見通しは何か

がですか。

大使 ドミニカは近年堅実な経済成長を続けており、国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会 (CEPAL) によれば、2014年の成長率は7.3%、15年はラテンアメリカ・カリブ地域の成長率がマイナス0.4%の中でドミニカはプラス6.6%と地域で最高の成長率を達成しました。今年の内需および対外要因も好調で力強い成長が期待されています。15年の世銀統計ではドミニカが7%、パナマが6%でした。

経済成長の原動力は観光、鉱業、海外のドミニカ人からの送金、農業、フリーゾーン、主要貿易パートナーである米国経済の回復および石油価格の低下等によります。ドミニカ経済の将来性も明るいです。政府はこれまでの実績を定着させるべく、開発政策をさらに深化させる強い決意を示しています。

一 最も重要な政策課題は貧困削減と教育の質の向上かと思われませんが、現状と課題につきどう見られますか。

大使 ドミニカは開発途上国としてやるべきことは未だ山ほどあります。メディナ大統領はGDPの4%を教育に投資し、全国津々浦々に学校を建設してきました。教員の能力向上のために投資し、給与も改善しました。次期4年間に各生徒に1台のパソコンを支給し、デジタル・ネットワークを拡大するとともに、全国でWi-Fiを使えるようにする予定です。教育分野では真の革命が進んでいます。保健分野も同様です。すべての公立病院で変革が行われています。過去4年間に現政府の積極的な社会政策の結果、100万人近くのドミニカ人が貧困を脱しました。

一 ドミニカには、米国との近接性、カリブ海の中心地、及び米国との自由貿易協定が発効されているという利点がありますが、将来的にどのような日本との貿易関係を期待されますか。

大使 ドミニカと日本は83年間にわたり堅固で、建設的な関係を維持してきました。両国関係は内政不干渉、国際的相互主義および相互協力の原則に基づいています。近年の二国間貿易は中国製品の進出によりやや低下していますが、ドミニカとしてはあらゆるレベルで日本との交流の増進に努めています。今後はさらに多くの日本人がこの国を訪ずれ、ドミニカ人が日本を訪問することを期待しています。それが一層幅広く、建設的な関係の扉を開くことに貢

献するでしょう。現在も両国の企業家間で興味深い交流が行われています。我々としては日本の方々さらに、より良く我々を知って頂くよう努力しています。

一 日本からの進出日系企業は約10社と聞いていますが、他にドミニカに進出すれば成功するだろうと思われる業種はありますか。

大使 ドミニカは開かれた経済で、世界のすべての国から資本と企業家を誘致すべく努めています。わが国は中米・カリブ地域において外国の直接投資を最も多く受け入れている国です。観光客の受け入れ数ではラテンアメリカ第3位です。現在多くのドミニカ企業が日本市場に関心を示しています。当大使館ではドミニカの企業家との意思疎通を密にし、日本の企業家とコンタクトできるよう努めています。両国間には将来的にさらに広範、かつ強固な関係を築き得る余地が大です。

一 日本はドミニカに対する主要援助国ですが、貴国の急速な経済成長にともない、最近是一般プロジェクト型の無償援助は減少していると理解しています。今後どのような分野で、どのような援助形態を期待していますか。

大使 確かにドミニカの一人当たり所得の上昇にともない数年前から一般プロジェクト型の無償援助は供与されていませんが、日本は常にわが国への連帯を示されており、ドミニカ国民は日本に対し感謝の念を抱いています。日本政府の招聘による留学生や技術研修生は増えており、またドミニカの多くの機関が日本の技術協力を受けています。当大使館としては両国の民間企業間で互恵的な協力関係を築けないか模索しています。例えば日本企業の農業分野での実験などをドミニカで行えないかと考えています。政府中心型協力と民間中心型協力をうまく組み合わせる方途はないものか知恵を絞るべきかと思えます。

一 両国間関係を一層促進、発展させるためには何が必要だとお考えですか。

大使 通商関係は今後増大するでしょう。わが国の企業家は日本市場への関心を一段と高めています。我々の地域への日本の関心も最近とみに高まっています。ドミニカは中米統合機構(SICA)の一員です。日本との通商協定を締結する上で同機構は一つのキ

一となるでしょう。我々は日本との交流のレベルを上げるためのあらゆる可能性を探求しています。政府、民間部門、大学、NGO 等との緊密化を図っています。あらゆるイベントにおけるプレゼンスを高め、日本との関係促進に努めたいと思っています。

一 ドミニカは台湾と国交を維持し、中国とは外交関係を有していませんが、通商代表部を設置しており、貿易は活発と聞いていますが、如何ですか。

大使 わが国は現在台湾と極めて良好な外交関係を保っています。両国間の交流は日に日に増大しています。台湾政府はドミニカ国民および政府に対し強い連帯を示しています。

中国とは緊密な通商関係があります。中国製品の特質および価格もあり、近年両国間の貿易は急速に伸びています。ドミニカ政府と中国政府の交流も強化されています。現在わが国は両国ときわめて良好な関係を維持しています。

一 米国とキューバの国交再開がドミニカに及ぼす影響はいかがですか。

大使 影響はきわめて前向きなものでしょう。わが国は米国ともキューバともあらゆるレベルで良好な関係にあります。メディナ大統領は米・キューバ間の外交関係の全面的再開に賛成してきました。今後はキューバとドミニカが共同で米国に財とサービスを提供する等により対米貿易を増大できるでしょう。我々にはキューバ国民との共通点が多々あります。米国・キューバ関係の進展に伴い、巨大な米国市場をともに享受するチャンスが増えるでしょう。

一 最近のハイチとの関係は？

大使 ハイチ国民および政府との関係は良好です。ドミニカ政府も兄弟国ハイチを援助するため大いに努力し、犠牲を払っています。同国は現在臨時政府のもとにあり、その主要な任務は選挙を実施することです。新政府が成立し次第、両国間のさらなる緊密化を図るための話し合いが始まるでしょう。ハイチは我々の協力を必要としています。しかし仏、米およびラテンアメリカ諸国等も同国を支援する義務があるでしょう。

一 ドミニカには約 900 名の移住者・日系人が居住し、また両国間のスポーツ交流は盛んで、これまで多くのドミニカ人選手が日本のプロ野球界で活躍し

てきました。広島東洋カープがドミニカに野球アカデミーを設置しています。

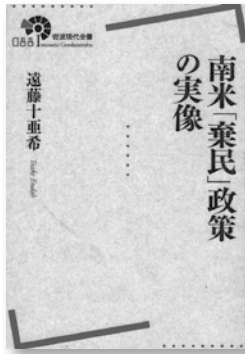
大使 わが国には各地に日本人社会があります。第二次世界大戦直後の経済困難により多くの日本人が新天地を求めて海外に出ましたが、その時わが国は日本人に対して扉を開きました。まさに本年7月16日、50周年記念を迎えます。ドミニカ人は常に日本人に感謝しており、我々は誇りをもって“我々の日本人”と呼んでいます。日系社会は完全に我々の社会に溶け込んでおり、さまざまな分野で活躍していますが、特にラ・ベガ地方のコンスタンサおよびハラバコアで野菜や花卉栽培に従事しています。ダハボンやモンテ・プラタにもおられます。我々は日系社会がさらに大きく育つことを願っています。同時に在日ドミニカ人も勤勉でその数は1,000人近くに上ります。

ワールド・ベースボール・クラシックを制した国は日本とドミニカのみです。それが両国のチームと選手の間を密にしています。現在50人以上のドミニカ人選手が在日しています。日本人ファンのアイドル選手もいます。両国の緊密化にとって野球は有力な手段です。26年前に広島東洋カープがドミニカにアカデミーを設立しましたが、我々は日本の他のチームにも門戸を開いています。

一 『ラテンアメリカ時報』の読者に対してなにかメッセージはありませんか。

大使 今回このような機会を与えて頂き心より感謝します。貴協会は在日ラテンアメリカ社会にとっても極めて有益な活動を効果的に展開しておられます。今後も末永いご成功を祈っています。

(インタビューー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤昌輝)



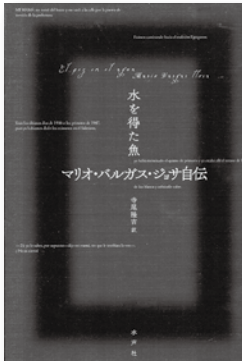
『南米「棄民」政策の実像』

遠藤 十亜希 岩波書店（現代全書）
2016年5月 247頁 2,200円+税 ISBN978-4-00-029188-0

本書は南米に移住した日本人と日本国家の歴史的関係を、国家が好ましからぬ者を海外移民という装置を使って疎外した「国家による国民の差別化」であり、その上で仮想的「国家・国民」関係の中に適宜包含し、日本のモラルや伝統で教化・再統合しようと試みる、国境という空間を超えての国家による権力行使であるという。著者は、米国で学位を取り現在ハワイ東海インターナショナルカレッジの教授を務める移民政策研究者。

日本人南米移民の歴史を戦前戦後の国策としての移民支援制度、移民たちがどこから来たか、戦前の移民送り出し前夜の政治状況、政治的ガス抜き装置としての戦前移民、戦後の保守政治と南米移民を膨大な文献から丹念に辿った労作であり、戦前は地方貧農や失業者、被差別部落問題が、戦後移民は大陸からの引き揚げ者、労働組合員の探鉱離職者等が排除のターゲットになったと検証する。

著者は書名にも拘わらず「南米移民は棄民」と決めつけてはいないが、戦前戦後を通じて移民に対する国家的干渉・介入が多々行われ、遠隔ナショナリズムが作用し（例：勝ち組・負け組抗争）、国策植民会社の入植は企業移民であり、移民をコチア農協設立やセラード農業開発を含め日本の資源政策実現に協力せしめた如く述べている。しかし、これまで多くの移民史研究が明らかにしてきた移民の自助努力や自発的な創意工夫などには触れておらず、主題に合わせて論理を進めている感が拭いきれず、また地名や人名のポルトガル語読みにも誤りが少なからずある。 (桜井 敏浩)



『水を得た魚 マリオ・バルガス・ジョサ自伝』

マリオ・バルガス・ジョサ 寺尾隆吉訳 水声社
2016年3月 505頁 4,000円+税 ISBN978-4-8010-0156-5

いまや「ノーベル文学賞受賞者」（2010年）という賛辞が付いてまわるバルガス・ジョサの、両親の出会いから始まる出生、幼少期と、1990年のペルー大統領選挙に立候補して圧倒的優位が伝えられながら決選投票で無名の日系人アルベルト・フジモリに惨敗するまでの回想録に、フジモリ政権発足後の92年のフジモリ大統領による“自主クーデター”についての所見を述べた追記が付されている。

すでに作家として世界的に名声を確立していたが、独裁政権下のペルーを描いた『ラ・カテドラルの対話』、軍事政権の腐敗体質を風刺した『バンタレオン大尉と女たち』などから政治を絡ませた小説を出し、74年に欧州からペルーに戻って政治問題に積極的に発言してきた彼が、87年のアラン・ガルシア APLA 党政権が行った銀行国有化に反対する運動の先頭に立ち、これが90年の大統領選挙立候補に繋がったのだが、本書は奇数章は幼少時代から作家として踏み出すまでを、偶数章では3年間の大統領選挙戦の推移を追想していて、当時バルガス・ジョサが何を考え、活動したか、周囲がどのように動き、社会情勢がどのように変わっていったかをリアルに詳しく知ることが出来る。例えば第20章でフジモリの台頭にともなって過激になった日系人への嫌がらせを批判し、第一次投票の翌日フジモリに面会を求め、市内でひそかに二人だけでフジモリが決選投票に勝つために APLA や左翼と手を握ることにならぬよう、決選投票の棄権を打ち合わせたことなども述べているが、自由主義への一途な信念、お人好しといわれても仕方ない性格、貧困層に好意を抱かず目を向けない姿が見えてきて、大統領選挙は負けるべくして敗れた、彼は大統領にならなくてよかったとも感じさせる自伝である。 (桜井 敏浩)